昌蒲なるなり、此に高麗石菖蒲といふものは、錢蒲といふもの是也、アヤメといふ義不詳、昔も此物の名によりて相論の事ありなど云ひ傳へしなり、

〔日本釋名下草〕菖蒲（アヤメ）　あやはあざやかも也、めは見ゆる也、他の草より色うるはしく、あざやかに見ゆる也、せきしやうの事也、花さくあやめは溪蓀、はなあやめと云、菖蒲の葉ににたる故に、是もあやめと云、

〔八雲御抄三上草〕菖蒲　あやめぐさ　抑只あやめとばかりいへり、但くちなはの名なりと云り、通俊匡房と有種々相論、但あやめといへるうたおほし、非難、通俊難無由、万にあやめぐさかつらにきむ日いへり、

〔藻鹽草八草〕菖蒲

あやめ草○註略　あや引、あやめふく、五月五日　あやめかほる、ねながきよしいへり、あやめ草こますさめず、あやめを馬くはずと云々、すさめぬとはくはぬ事也、あやめのくさ、拾遺　袖のうへにねざしとゞめよあやめ草、あやめ草玉にぬく、同○同恐衍、万　かくれぬ下よりねざすあやめ草、やどにかざれる花のあやめ草、

〔宜禁本草乾藥中草〕菖蒲　辛温平、開心孔、通九竅、明耳目、出音聲、止小便利、小兒温瘧身熱不解作浴湯、久服益智、聰明不忘不迷、五月十二月採根甚去虫并蚤虱、抱朴子、韓蘒服菖蒲十三年、身上生毛、日視書万言皆誦之、冬袒不寒、近人瓦石種、旦夕易水則茂、水濁有泥滓則萎、

〔和漢三才圖會九十七水草〕菖蒲　昌陽　堯韭　水劒草　和名阿夜女久佐、今唯呼字音、

本綱、菖蒲冬至後五十七日菖始生、菖者百草之先生者、春生青葉、四時常青、新舊相代、葉中心有脊、狀如劒、二三月間抽莖開細黃花成穗、其根一寸九節者良、

按菖蒲者總名而本草有五種、今分爲三種、菖蒲石菖白菖（アヤメ）是也、入藥宜用石菖根、醫書雖曰菖蒲根不可惑、菖蒲乃石菖之大者長二三尺、濶五六分、有劒脊、五月五日葺屋檐者也、或件日浴菖蒲湯、或